

ニュースレター

No.34

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

就任挨拶

所長 渡部 洋

4月より所長に就任いたしました渡部です。本研究所は、関東学院大学神学部のプロテスタント史研究所を前身として2001年に設立されました。多くのキリスト教学校にある「キリスト教文化研究所」ではなく、キリスト教と諸科学との対話を求め、キリスト者と非キリスト者が協働し学際的研究を行う研究機関です。2013年8月現在、7学部の研究者が集まり、24名の学内研究者、31名の客員研究員を擁し、学部を横断した7つの研究グループにて、活発な研究活動を展開しております。本年度も、既に各グループが年間計画に従い活動を始めています。

中学校から博士前期課程までの12年間を関東学院でキリスト教に触れ、育てられた私は大学1年のとき兵庫県南部地震での生活支援ボランティアに参加いたしました。また東北地方太平洋沖地震の折にも支援活動に参加し、建築物の構造や防災への関心を強めてまいりました。現在は建築・環境学部にて建築物の耐震性・耐久性についての研究を行なっています。折しも本年は、関東大震災から90年の節目であり、当研究所では横浜開港資料館主催「被災者が語る関東大震災」に研究所所蔵の坂田祐先生の日記を出陳する機会を得、来春には、公開シンポジウム「原発・エネルギー・環境問題と宗教の役割」の開催を予定しています。

本研究所は学院に附置された諸研究期間の中でも、“キリスト教と文化”という本学の特色となる研究を行う役割を担い、教育に結び付けていく期待が寄せられていると思います。今年度も研究所では関東学院の建学の精神でもあるキリスト教と諸科学との関係に注目し、様々な研究の実施を推し進めようと思います。また研究所がこれまでに経験してきた“人との出会い”や“かかわり”を大切に、これからも継続的に活動していきたいと考えております。

最後になりましたが、今後の研究所の歩みの上に皆さま方の変わらないご理解とご支援をこれまで通り賜りますようお願い申し上げます。就任の挨拶とさせていただきます。



侍従川・平潟湾という貴重な汽水域を生きた共生・環境教育の場に！

関東学院六浦小学校 校長 石塚武志

畠山重篤氏の活動を初めて知ったのは1999年のことです。社会科の教材に畠山氏の「漁師が山に木を植える」というものがあり、当時受け持っていた4年生の子ども達と一緒に考えたのが最初でした。関東学院小学校のライブラリーにあった『かがくのとも』にも掲載されていました。一見、つながりがなさそうに見える漁師と山の関係に魅かれました。そこには、私たちが学ばべき食物連鎖の仕組み、山と川と海のつながりがあり、全く別の角度から漁業や環境について考えさせられる取組でした。

2013年4月から六浦小学校の校長となった私にとって、六浦の地は、直接のフィールドです。私の教育ビジョンに、「汽水域である侍従川・平潟湾を子どもたちの教育活動に活かす」というのがありません。校長として六浦小学校に赴任する前に、畠山氏の講演を聴くことができたのは絶好のタイミングでした。現在、世界中に「森は海の恋人」運動を広め、実践している畠山氏の話を直接お聴きするとともに、汽水域である平潟湾について、専門的見地からこのフィールドの価値について伺うことができました。



侍従川にて自ら調査を行う石塚校長

石塚…先ほど「東京湾で牡蠣が」という話がありましたが、関東学院の周りの侍従川と平潟湾は、満潮になると川の水位が満々となり、干潮になるとアサリも採れるという所です。野島には、横浜で唯一の自然の砂浜が残っていて、その沖では海苔の養殖が行われています。関東学院が野島や平潟湾という汽水域に隣接し、海がありかつ住宅が沢山あるこの地をご覧になって、この横浜のこの地で、畠山さんが何か、感想だとか、こう言うことができるのではないか、ということがありましたら教えていただきたい。

畠山…これは何か、すごいいいフィールドですよ。汽水域がね。何か、子どもたちの体験学習というか、興味系に是非こういうものを、是非、出かけて行って、子どもたちに体感させるということをやっていたらどうですかね。ここでできるかどうかはちょっと、若干、心配なところはありますけれど、私たちの体験学習の目玉はですね、プランクトンネットでプランクトンを取ってコップにいっぱい採ってですね、それを子どもたちに飲ませるといってやっています。結局、植物プランクトンが一番最初に体に取り込むのは、人間が流したものを取り込むわけですよ。だから、プランクトンを飲むということは、人間が流したものを飲むということに通じるわけじゃないですか。すると、子どもたちはそういう事を非常にショックに受け止める。そうすると自分の生活をどうしたらいいかと思直していく。これはものすごい教育効果は高いですよ。その結果として、「朝シャンで使うシャンプーの量を半分にしました」と、こうなるんです。だから、その辺についている牡蠣は教育的ポジションにあると思いますから、冬だったら火を通せば十分食べられますよ。関東学院はもつと山の方にあるんだと思ったら、こんな海のそばにあって、しかも埋立地だからね。だから、東京湾を、つまり江戸前というものを体感するのにすごいいいポジションになるなと思えましたね。もったいないですよ、これはね。



ら、その辺についている牡蠣は教育的ポジションにあると思いますから、冬だったら火を通せば十分食べられますよ。関東学院はもつと山の方にあるんだと思ったら、こんな海のそばにあって、しかも埋立地だからね。だから、東京湾を、つまり江戸前というものを体感するのにすごいいいポジションになるなと思えましたね。もったいないですよ、これはね。

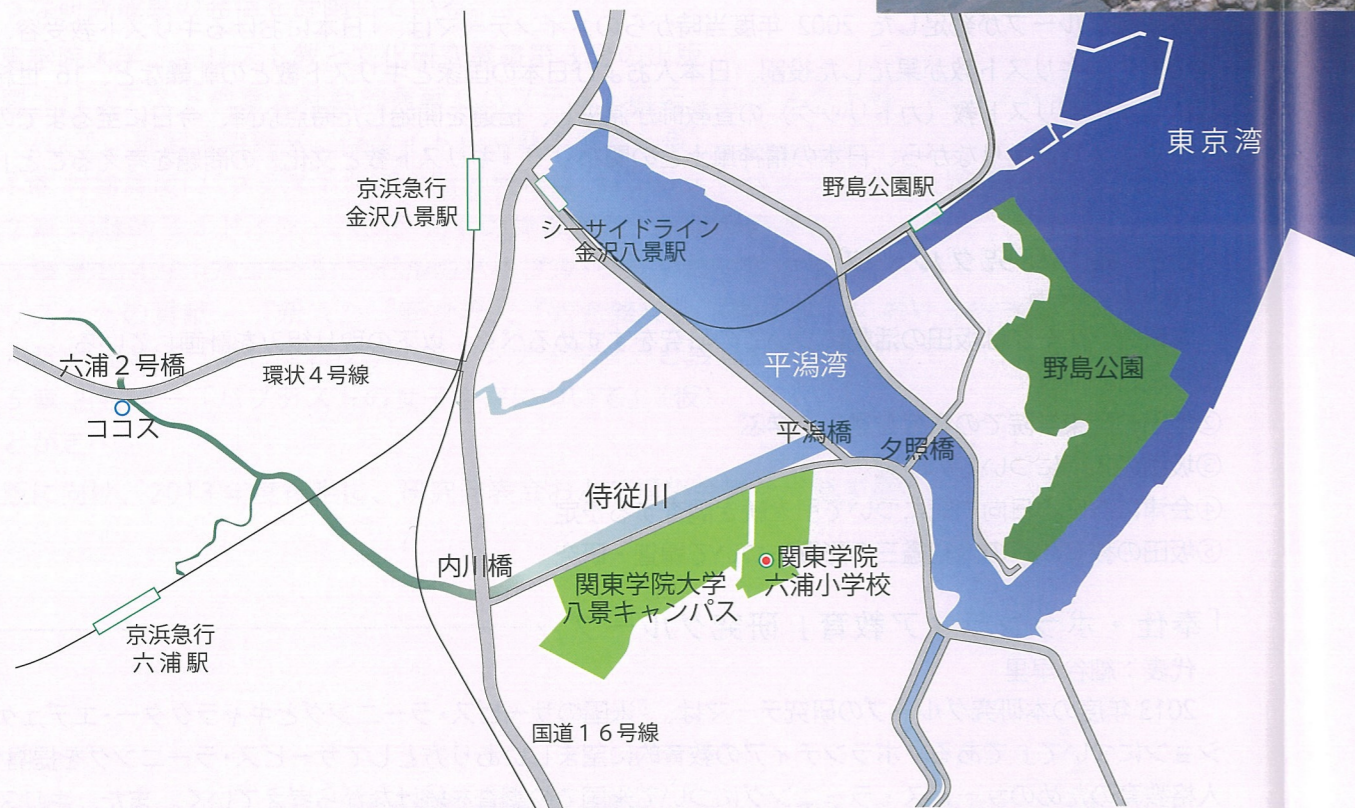


たには牡蠣がびっしり。満潮時の今、夕照橋を過ぎるとそこはアオサとボウアオサの海です。手ですくって見ると巻貝の稚貝がボウアオサに絡まるように付いていて、アオサが貝の子どもを育てているのが分かります。平潟橋をくぐり、侍従川に入りました。段差の真牡蠣に接近し、箱メガネで観察すると、黒い小魚や卵を抱えたエビがいます。牡蠣についているたくさんさんのフジツボが触手をしきりに動かしています。更に遡り、内川橋をくぐると少しずつ海から川になっていくのが分かります。環状四号線のココスの辺りまで遡り、引き返しました。カヌーでの散策は、汽水域の環境に直接触れながら時が経つのを忘れるほど楽しい体験でした。

侍従川・平潟湾というこの貴重な汽水域を、子どもたちと共生と環境を考える生きた学びの場としていきたいと思えます。

私は4月から毎日、侍従川・平潟湾を見ながら徒歩で通勤しています。満潮・干潮時の川の水位の差と流れの違い、川底が見えるほど水が澄んでいる日、生活排水で濁っている日、アオサが島のようにいくつも浮いている日、ごみが浮かんでいる日など、川は毎日違う顔を見せます。生き物も豊富です。カワセミ、カモ、ウミウ、エイ、フグ、クロダイ、イシダイ、ミスクラゲ、アカクラゲ、ボラ、イワガニ、真牡蠣などを見かけます。島山氏は「山から海の方だけではなく、海から山を見て下さい。海の恵みがああ山の流れから注がれていることに思いを馳せてみると、色々なものが見えてきます。」と言います。振り返るとそこには、金沢の豊かな山、川、海がつながって見えます。

先日、カヌーで平潟湾・侍従川を散策しました。夕照橋を初めてくぐりました。橋げ



いしづか たけし 1963年(昭和38年)2月1日生まれ。葉山町立葉山小学校、中学校、県立横須賀高等学校を経て立教大学文学部教育学科を卒業。大正自由教育を研究。関東学院六浦小学校教諭(8年)、関東学院小学校教諭(13年)、同小教頭(5年)、2013年4月より関東学院六浦小学校校長。日本基督教団葉山教会長老。

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト

代表：鄧捷

本研究はアジアにおけるキリスト教受容の歴史解明をテーマとした思想史の研究である。ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の三者に共有される思想的・神学的研究を主たる課題と定め、各々の教派に関して個々の研究計画を立て、それぞれが有機的な関係を持つよう研究を進めて行くこととする。

2012年度はシルクロードを東漸し、ペルシア人司祭によって唐代の中国に伝播された古代キリスト教「景教（ネストリウス派）」に焦点をあて、東漸したヘブライズムについての足跡を辿る調査活動を中国陝西省西安にて行った。その調査結果は今年度の研究所所報に特別報告として出稿する予定である。

また今年度の調査活動は早稲田大、中国昆明理工大、タイ国立タマサート大と連携した調査チームを構成し、中国河南省にて現地調査を行う。調査チームは11月に開封市を訪ね、宋代以前に形成され、現存するユダヤ人コミュニティでの現地調査を行い、洛陽市では出土されたソグド人景教宣教師による教本『大秦景教宣元至本経及幢記』の調査活動を行う予定である。

「バプテスト」研究プロジェクト

代表：村椿 真理

本研究プロジェクトは「バプテストと教育」を本年度の研究テーマとし、2013年度は以下のような研究成果の発信を計画している。

関東学院大学 キリスト教と文化研究叢書第3号の出版

仮題『バプテスト教育と社会的貢献』バプテスト研究プロジェクト編、関東学院大学出版会発行（以下、掲載予定論文。仮タイトル、章の順番も仮）

第1章 村椿真理「バプテストの新生論と教育観：バプテスト神学から捉えた関東学院の校訓理解」

第2章 内藤幹子「ドイツ・バプテストの神学教育：神学校の歩み」

第3章 影山礼子「アニー・S・ブゼルのバイブル・クラスの学生たちと近代日本キリスト教：ジャーナリズムへの貢献 -- 『新人』、『新女界』、『六合雑誌』、『開拓者』における記事の整理と考察」

第4章 小玉敏子「駿台英和女学校長アンナ・キダーと捜真女学校長クララ・カンヴァース」

第5章 古谷圭一「バプテストの女子学寮について」（仮）

あとがき

出版に向け、2013年度後半に、研究発表会および編集会議を開催する。

各プロジェクト・グループによる研究会等の予定は、随時ホームページに掲載していますので、ご参照下さい。

<http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp/>

「依存症とキリスト教」研究グループ

代表：鈴木 公基

本研究グループの主目的は、「依存症」および「依存症社会」の構造と特質をキリスト教、ことに「環境神学」の視点から分析し、解析のための方法と手段を探ることである。主な研究課題として、以下のテーマを計画している。

①依存症に関する総合的調査研究、②依存症社会に関する総合的調査研究、③依存症からの回復のための12ステップ方式自助グループの実践、④大麻・ドラッグ類・不登校・引きこもり等の最近の大学生等に起こっている学生・若者依存症問題に関する研究、⑤大地震・原発事故等の災害による依存症と依存症社会の深刻化の分析と環境神学の構築、⑥公開シンポジウムの開催、⑦出版計画の具体的作業

「いのちを考える」研究グループ

代表：松田 和憲

2013年度は研究テーマを「被災地へのボランティア活動を通じた支援者の心理的变化——『いのち』の観点から」としてグループでの活動を進めていきたい。関東学院大学では、2011年、2012年と東日本大震災後の被災地に教職員ならびに学生のチームを派遣するボランティア活動を展開している。ボランティア活動にかかわった人々は、震災の被害を目の当たりにし、人間の生や死、生きるとはどういうことなのか、いのちをどのようにとらえるのか、といった考えに変化がみられたと考えられる。ボランティアにかかわった人々へのインタビュー調査から、心理的变化についての詳細な検討を行う。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ

代表：萩原 美津

本研究グループが発足した2002年度当時からのメインテーマは、「日本におけるキリスト教受容、日本の文化にキリスト教が果たした役割、日本人および日本の国家とキリスト教との軋轢など、16世紀半ばに日本にキリスト教（カトリック）の宣教師が渡来し、伝道を開始した時点以降、今日に至るまでの長い歴史をふりかえりながら、日本の精神風土との関わりで『キリスト教と文化』の問題を考えること」である。

「坂田 祐」研究グループ

代表：鈴木 力

本研究グループは坂田の活動についての研究をすすめるべく、以下の取り組みを計画している。

- ①坂田日記研究
- ②坂田の関東学院での教育を通して学ぶ
- ③坂田の入信についての研究
- ④会津における日向内記について引き続き調査する予定
- ⑤坂田の教育観への内村鑑三の影響について調査・研究

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ

代表：細谷 早里

2013年度の本研究グループの研究テーマは、「米国のサービス・ラーニングとキャラクター・エデュケーションについて」である。ボランティアの教育的に望ましいあり方としてサービス・ラーニングを提唱し、人格教育のためのサービス・ラーニングについて米国での調査を続けながら考えていく。また、キリスト教大学としての理念と関東学院の建学の精神とを結びつけながら、大学のみならず幼稚園から一貫したサービス・ラーニングのあり方を考える。

研究所事務局新スタッフのお知らせ

こんにちは、キリスト教と文化研究所事務局スタッフの飯島浩子、菅野さつきです。長年事務局員としてお勤め頂いた牛坊千寿枝さんが8月31日をもって退職されました。その後を担う研究所事務局スタッフとして、私たち2名は書類の作成・処理、内外との連絡・調整など、主として机の上で行う作業を行っております。皆様にご当研究所が主催致します研究活動をよりいっそう身近なものとしてお届けできますよう、力を尽くして参りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2000年関東学院大学文学部英米文学科を卒業致しました飯島です。同学部西原克政先生には大変お世話になりました。まさか母校の研究所スタッフとして働かせて頂くとは思いませんでした。目下子育て真っ最中ではありますが、少しでも母校関東学院のお役に立てれば幸いです。

この9月よりスタッフに加えさせて頂きました菅野です。関東学院教会教会員のご紹介により、関東学院の門をくぐることとなりました。明治期に宣教師によって開校され、創立100年を超える今も、坂田祐学院長をはじめとするキリスト者の思いが脈々と受け継がれる様子を見て、背筋が伸びる思いが致します。



右から飯島事務員、菅野事務員 上は武田編集長

研究所は今年で開所10年を超えたそうです。研究者の皆様が培ってきた研究成果を大切に、所員、研究員、客員の皆様が思う存分研究作業を進めることができる環境を整えることが私たち事務職の職責です。国境を越えた学术交流がますます深まる中、今後さらに増えると予想される研究発表を含め、皆様の研究成果の発信をお手伝いし、新しい研究に向かう原動力の後押しができればと思います。まだまだ未熟ではございますが、どうかご指導のほどよろしくお願い致します。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話：045-786-7873(研究所直通 月～金曜9:30～17:30)

FAX：045-786-7806(研究所直通24時間受け付)

発行者：渡部 洋

Director: Hiroshi Watanabe